

三河商人道

PART
139

有限会社
クリエイターズ
ネットワーク
代表取締役 澤田英司 君



青年部は、

「原点」を思い返す場所



新入会員で卒業生という、岡崎YEGはじまって以来の存在であった澤田さんはやはりタダモノではない。まず肩書きは「クリエイティブディレクター」。何となく分かるけれども、ハッキリしないこのお仕事。具体的にどんなお仕事なのか伺ってみると、「企業の顔として認知されるものをつくりあげること」と一言でお返事してくださった。なるほど。でもなんとなくそれは大企業にだけ向けられたことのような気がします…。「そんなことはないですよ。中小企業にだって軸になるものが。それがハッキリすれば自分の会社に対して正しいお金の使い方ができるんです」。自分の企業らしくPRするための道筋を立てるのが澤田さんのお仕事ですね。

企業理念は「みせかけだけではないブランディング」。一過性のものではなく、10年先20年先のこと、がらっと方向性を変えるときが来たときのことまで考えてプランを立てていきます。それを実現させるには「徹底的に勉強すること、そしてクライアントと徹底的に話し合うこと」なのだそう。

実は澤田さん、肩書きはこれだけではなくプロのトランペット奏者としての顔もあるのです。東京芸大在学中にプロオーケストラのオーディションに合格して中退。しかしオーケストラだけでは生活が苦しかったので、大手広告代理店の広告音楽の作曲のアルバイトをしていたら、CM音楽担当のプロデューサーの話が来て、徐々に広告全般の仕事覚えて独立されたそうです。広告の仕事が忙しくなり、音楽家としての活動を疎かにしていた時期もありましたが、2000年に大きな手術をした事をきっかけに自分の原点として見つめ直したと話されました。

澤田さんが青年部に入会したきっかけは、「死にたい場所が岡崎だ」ということに気付いたから。元々東京でのお仕事が多く、地元へ貢献することなど考えたこともなくて、どちらかというに関わりを避けてきたそう。しかし、ある時、娘さんが「今年はお父さんの大好きな岡崎でお正月が迎えられてよかったね」と澤田さんに言いました。「は？好きじゃないぞ？」と返事をしたところ、「お父さんはいつも名古屋と岡崎と一緒にされたり、岡崎をバカにされるとすっごく怒るじゃん。お父さんは岡崎が大好きなんだよ」と言われ、ハタと気付きました。「自分にキライだと言いついて聞かせていたんでしょね。へんなヨロイを着て歩いてたんだと思います。そのヨロイを脱がせてくれたのが青年部。地元を大切にしているメンバーに触れ、原点へ帰ることができました」。これからは、今までの分を取り返す意味も込めて、とにかく地元を大事にしたいと決意を新たにされていました。



オフィスは本当に不思議空間！



事務所の呼び鈴はなんと銅鑼（ドラ）。



取材スタッフと記念撮影。



取材担当/
情報発信委員会
加藤浩晃・浅井寮子